

——この文は夢に由来する。 この文は完全にフィクションである。現実の人物、組織などとは一切関係なく、類似があれば純粋な偶然である。

正文

「チャーリー、一緒にスーパーに行くか？」

「ずっと、自分の存在の価値を探している。この世界でどう生きるのが正しいのか。でも人は必ず死ぬ。結局、自分の欠点が見えず、自分の次の行動が正しいかどうか分からず、自分人生に少し悟りを得た頃には、もう取り返しがつかないのではないか。どうしようもない。神と悪魔、天国と地獄.....言い換えれば、一人の人生を観測し、最後にその正誤を判断する存在が本当にいるのか？

俺は.....」チャーリー・ウェンストンはキーボードを叩く手を止めた。答えた。

「うん。お父さん。」

「やっと書き始めたのか？」

「うん。でもここに座って三十分経ったけど、これしか書けなかった。」

「ん？ 見せてくれ.....神と悪魔、どうして急にこんなテーマを書こうと思ったんだ？」

「自分でも分からない。お父さん……」

「ん？」

「他の個体が俺たちを観測していると思うか？」

「無理に言うなら、その存在は人間が一般的にイメージする神様ではないかもしれない。」

「え？」

「もう、時間も遅いし、一緒にスーパーに行こう。」

「うん。」

……

夕方、夕食の準備のため、アデ・ウェンストンは車を運転してスーパーへ食材を買いに行くことにし、息子のチャーリー・ウェンストンを誘って一緒にでかけた。

スーパーに着いたのはもう夜の八時だった。秋に移り変わっており、数十分後には空が徐々に暗くなる。

彼らは車を降りてスーパーに入り、入口のショッピングカートを押した。

パスタ、卵、トマト缶……リンゴ、バナナ、イチゴ、ブドウ……チャーリーはお菓子コーナーでポテトチップスとチョコレートビスケットを数袋取ってカートに入れた。

「おお、そうだ。家にシャンプーがなくなった。お前はここで待ってて、二階を見てくる。」アデがチャーリーに言った。

「うん。」

チャーリーは目の前の棚のお菓子を選び続けた。すべてがとてもありふれていて、変わらない。

チャーリーがそう思っていたちょうどその時、しゃがんでお菓子を見ていた瞬間に、突然停電した。

窓の外にも夕陽が差し込んでいない……窓の外は真っ暗だったが、今の時間ならまだ完全に暗くなりきっていないはずだ。真っ暗で手の届かないスーパーの中は異常に静かで、他の客の声が聞こえず、まるで彼らが突然消えたかのようだった。「それとも俺たちが突然消えたのか？」チャーリーは思った。「そうだ、お父さん——」チャーリーは一度叫んだが、父親の返事は聞こえなかった。

暗闇の中で、チャーリーは体を低くし、携帯電話のライトをつけた。

「パタ、パタ、パタ、パタ……」

すぐそばに足音が聞こえてきた。その足音は非常に速く、すぐに音は遠くに消えた。

チャーリーは足を止め、薄暗い携帯のライトの中で恐怖と不安に襲われ、大きく息を荒げた。彼は胸ポケットの吸入スプレーを取り出し、緊張して急な呼吸が少し落ち着いた。

「パタ、パタ、パタ……」

また同じ足音だったが、チャーリーは今度の足音が自分に非常に近いと感じた。人型の黒い影が突然チャーリーの目の前を横切った。

「うわっ——誰だそこにいるんだ?! 怖がらせないでくれ! お父さん?! お前そこにいるのか?」チャーリーは息を呑み、その後叫んだ。

遠くの足音がぴたりと止まった。

「パタ……パタ……パタ……」まるで足音の主人が戻ってきて、チャーリーの声を捜しているようだった。

足音がますます速く、ますます近づいてくるにつれ、チャーリーは慌てて逃げ出したが、棚にぶつかり、商品につまずいて倒れた。

遠くの携帯ライトが届かない暗闇の中、突然二つの血のような赤い光点が現れた。光点は足音に合わせて上下に揺れ、時々暗闇に消え、再び現れるたびにチャーリーに一步近づいていた。チャーリーは這いずりながら後退し、もう分かっていた。あの二つの赤い光は足音の主人の目だ。

目の前で、その血のように赤い二つの光点が突然消え、足音もそれとともに消えた。一秒、二秒、三、四……半分経ったが、足音も赤い目はチャーリーの視界に現れなかった。

彼の心が少し落ち着いたその瞬間、突然耳をつんざくような叫び声がし、牙だらけの大きな口が突然チャーリーの目の前に現れた。歯の隙間から黒赤い粘つく液体が滴り落ち、悪臭を放ち、二つの電球ほどの血赤い目が彼を激しく睨みつけていた。

「啊啊——！」チャーリーは目の前の怪物に驚愕し、急な呼吸が重度の喘息を誘発した。窒息しそうなチャーリーは携帯を強く握り、怪物は黒く細長い指をチャーリーに向かって伸ばし、携帯のライトもそれとともに暗くなり、やがて

消えた——携帯のライトはまだ点灯しているのに、光が射出されなかった。目の前の怪物の手が、大きく息を吸うチャーリーの口と、大きく見開いた眼球に突き刺さろうとしたその瞬間……

「チャーリー?! 大丈夫か! 離れろ! 俺の息子から離れろ——!」

アデの叫び声が怪物の後ろから聞こえ、同時にチャーリーの目の前の生物は苦しげに叫びながら離れ、携帯のライトも正常に戻った。

「おお、チャーリー、いい子だ、大丈夫だ、早く、早く、これを啜えて。」

アデはチャーリーのそばに駆け寄り、懐中電灯を置き、上着の内ポケットの喘息治療用霧化薬をチャーリーの口に押し込んだ……チャーリーの呼吸は薬の吸入とともに徐々に落ち着いた。

……

「お父さん、あれは何だった?」チャーリーが尋ねた。

「話せば長くなる。少なくとも今は話す時じゃない。まずここから出よう、安全な場所に行ってから説明する。」

「うん。」

「歩けるか？ 背負おうか。」

「大丈夫。」

「よし、じゃあ行くぞ。」

「うん。」

アデは懐中電灯を手にし、右手でチャーリーの手を強く握り、慎重に一步一步
スーパーの出口に向かって進んだ。

.....

どれくらい経ったか分からない.....

「出口はもう近い。」アデは振り返って息子に言った。

確かに、目の前の少し先に四角い光が見えた。スーパーの出口のはずだ。

「でも今は夜のはずだ。どうして光があるんだ？ まあいい、考えすぎない。

外に出ることが先だ。安全になったらお父さんがちゃんと説明してくれる。」

チャーリーは思った。

出口が目の前に来た瞬間、鋭い叫び声がし、その怪物がチャーリーの足首を掴

んだ。アデ父子は数メートル後ろに引きずられた。

「ああ——！」

「チャーリー！ 離せ！ 悪魔め！ 地獄に帰れ！」アデは服の中からネックレスを取り出した。そこには十字架のペンダントがついていた。

アデが悪魔と呼んだ存在は、アデの手にある十字架に反応し始め、苦しげに嘆き、チャーリーの足首を離した。宙に浮いていたチャーリーも地面に落ちた。

「早く、チャーリー、立て。」

しかしこの時のチャーリーは恐怖で急激に呼吸し、再び喘息を誘発した。

「早く出ないと、いつまた襲ってくるか分からない。チャーリーに薬を使う時間はない。」アデは思った。

そこでアデは息子を抱き上げて振り返り全力で走った。出口に着く寸前、アデは突然足を止め、口から血が噴き出した。

血まみれの顔のチャーリーはまだ喘息で急激に呼吸し、まるで首を絞められているようだった。両手で父親アデのジャケットを強く握り、無力に父親の腕の中で涙を流した。

アデは両膝をつき、優しくチャーリーを出口の外に下ろし、血にまみれた唇でチャーリーに微笑んだ。突然、アデは吊り上げられて後ろの暗闇に引きずられていった。暗闇の中、光るものがチャーリーに向かって飛んできて、彼の胸に落ちた。

それは吸入器と、アデのネックレスだった。

.....

查理は目を開けた。見慣れた天井、自分の寝室だ。傍らには見知らぬ男がいた。

「こんにちは、チャーリー。」男はチャーリーが目を開けたのを見て言った。

「あなたは？ どうして僕の部屋に.....僕、覚えてる.....お父さんが.....」

「どう説明したらいいか.....直接言うのがいいかな.....私の名はサリフェン・

エルデン、サリフェンと呼んでくれ。私はサタン様の命令を受けて地上に来て君を助けるために来た。」

「え？ 冗談ですよ？ 」チャーリーは困惑した。

「いや、本気だ。信じないなら見てみる。」サリフェンは右腕を自分の頭に払い、頭頂部の両側に突然後ろに曲がった二本の長い角が現れた。次に背を向け、ズボンを下げ、後腰を露わにし、黒い尻尾がズボンの奥から這い出てきた。

「あ、あなた何を……」チャーリーは彼がズボンを脱ごうとしていると思い、慌てて布団の中に隠れたが、目は半分外に出ていた。「これ……あなたの角と尻尾、本物ですか？」

「本物だ。触ってみてもいい。」

サリフェンは顔をチャーリーに近づけた。チャーリーは手を伸ばしてその長い角を撫でた。確かに温度があり、力を入れて引っ張ってみると、頭に生えているのは間違いなかった。

「分かった、ひとまず信じるよ。だって僕とお父さんがスーパーに行った時にあんなことが起きたんだから……でもお父さんは逃げられなかった。全部僕のせいだ。」

「自分を責める必要はない。サタン様はアデのことは自分が引き受ける、と言っていた。私に与えられた任務は君の安全を確保し、君を地獄へ連れて行き、サタン様の御前に届けることだ。」

「なぜ？」

「詳細はサタン様が直接説明してくれる。ただし、まだ時間はある。君が望むなら、少し調べることができる。君の出自について、君も知るべきだ。」

「調べる、僕の出自……できるならできるけど、具体的にどうするのか、まださっぱり分らない。そうだ、今何時？」

「午後三時だ。」

「午後三時……」

「どうした？」

「うん……急に一人の人のことを思い出した。それはお父さんの友人で、市中心部の国立病院で働いている、産婦人科の医者だ。名前は……ラプラス、だった。お父さんが言っていた、当時お母さんの出産を手伝ったのは彼だって。でも僕が物心ついてから、お母さんには一度も会ったことがない。家にはお母さんの写真はあるけど……お父さんに聞いたら、説明は……お母さんは僕を産んだ後、去った、ということだった。去ったが文字通りの意味か、それとも僕のせいで難産で死んだのか、お父さんは最後まで完全な説明をしてくれなかった。あ、そうだ、ラプラス叔父さんに電話して確認しなきゃ。もうここに引っ

越してきてからずいぶん会っていないし、まだあの病院で働いているかどうか
分からない。電話帳……確か書斎に……」

サリフェンはチャーリーに従って書斎へ行き、すぐにチャーリーは本棚の中で
分厚い電話帳の束を見つけ、丁寧にめくり、数分後、ラプラスの電話番号を見
つけ、かけた。

……

「もしもし、ラプラス叔父さんですか？ チャーリー・ウェンストンです。」

「おお、チャーリーか。久しぶりだな。お父さんとお前は元気か？」

「うん……」

「電話してきたのは、何かあったのか？」

「あ、実は……自分の出自について知りたいんです。昔、お父さんが言ってい
たのは、叔父さんがお母さんの出産を手伝ってくれたって。でもお母さんのこ
とについては、お父さんほとんど話してくれなくて。だから叔父さんに僕の出
自について聞きたくて。今もあの病院でお仕事ですか？ 時間があれば、そこ
に行って叔父さんに会いたいんです。」

「すまない、チャーリー。私はもう分院に異動したんだ……君と会って話したい気持ちはあるが、分院は君たちの住まいからとても遠い……君の出自は電話で三言二言で説明できるものじゃない……資料をいくつか準備して、メールで君のアドレスに送るよ……それと、アデは日記を書く習慣があったはずだ。君のことについてもアデは日記に記録しているだろう。家で探してみなさい。」

「分かりました、ありがとうございます。」

「礼はいらないよ。こちらも仕事があるから、もう切るよ。アデによろしく伝えてくれ。」

「はい、分かりました。さようなら、ラプラス叔父さん。」

「さようなら、チャーリー。」

……

電話を切った後、チャーリーは父親の日記を探し始めた。

幸い、チャーリーはかつて父親が何かを書いているのを見たことがあり、具体的にどこに置いていたか覚えていた。その頃チャーリーはまだ小さく、身長がアデの本を置く位置に届かなかった。

チャーリーは記憶にある位置に移動し、確かに父親の日記がそこに収納されていた。

彼は一番右端の一冊を取り、開いた。それは父親のここ数ヶ月の日記だった。

もし時系列で並んでいるなら……

そう思い、チャーリーは左端の一冊を取り、開いた。中にはアデの幼少期の日記が記されていた。

「うん……これだと早すぎる……」

……

左から一冊ずつめくり、サリフェンもチャーリーのそばに来て手伝った。数分

後、サリフェンが言った。「これ……これじゃないか？」

「見せて……」

日記にはこう書かれていた：

「1996.6.6 今日は私を極度に恐怖させた朝だった。昨夜……」

……

1996年6月5日夜9時、21歳のアデはいつものように電気を消して眠りにつき、すぐに夢の中に入った。そしてこれがチャーリー誕生の始まりだった。

アデの眼球はまぶたの下で激しく動き、額には数滴の汗が浮かび、急激な呼吸を繰り返していた。まるで悪夢を見ているようだった。

確かにそれは悪夢だった。

夢とは、人間の脳が夜間に休眠する際に生み出す産物であり、率直に言えば人間自身の産物である。夜の眠りの中で、夢の主人は多かれ少なかれ夢の展開を制御できるが、アデの今回の夢は、どうやら彼自身の夢の中ではないようだった。

それは夢ではあったが、アデは極めて清醒だった。彼は自分がまだベッドで眠っていることをはっきりと認識していたのに、どうしても自分の体を目覚めさせることができなかった。アデは夢の中で……裸の体で真っ暗な中を手探りし、突然四肢が拘束され、何かの力で体が浮かされ、手のひらが自分の体を撫で回していた。アデは必死に抵抗したが、拘束から逃れることはできなかった。

すぐにその手はアデの全身を這い回り、今度はアデの私部に向かっていった。

アデは真っ暗闇の中で、冷たい手のひらに私部を撫でられ、恐怖が全身を覆い、震えが止まらなかったが、陰茎は勝手に股間で勃起した。

アデは体を這う手のひらがさらに増えたのを感じ、背中が突然熱い体に触れられた。それは手のひらの主人の体のはずだ。

背中から温かさが伝わり、手のひらの主人の胴体らしい。一片の闇の中で犯される恐怖が、背中から温かさが全身に広がり、アデはわずかな安心を感じた。

その瞬間、アデの両脚が引き開かれ、棒状のものが睾丸に擦りつけられ、続いて挿入された……

アデの睾丸の後ろは、後ろの者の挿入とともに激しい、刺すような痛みを生んだ。それでも彼が必死にもがき、叫んでも、何も聞こえず、何も見えなかった。

後ろの者のたびたびの深部への侵入とともに、アデは痛みで体を震わせ、涙が流れているのを感じた。熱い流れが両脚の間に噴き出し、脚を伝って流れ落ちた。

アデはさらに十数分犯され続け、気を失いそうになった時、後ろの者がアデの肩に噛みつき、体を震わせ、アデは体内に熱い流れが何度も射入されるのを感じた。奇跡的に、下の挿入された箇所への痛みがかなり軽減した。

アデは体内から巨大なものが引き抜かれるのを感じ、背中に密着していた体と体を這っていた手も消えた。

続いて、アデは目覚めた。

目覚めたアデは窓の外を見た。もう明るくなっていた。遅れて気づいたが、布団とシーツがびしょ濡れで、睾丸と肛門の間が痛くて震えていた。布団をめくって見ようとした瞬間、突然ドアがノックされた。

「アデ、起きたか？ もう出ないと遅刻するぞ。」

ラプラスだった。当時彼らは外で学び、共同アパートに住んでいた。

「あ……ラプラス、俺、ちょっと風邪引いたみたいで、力が全然出ない。代わりに休んでくれ。」アデは力なく言った。

「え？ じゃあ入って見てもいいか？」

「うん、ドア開いてる。」

ラプラスがアデの部屋のドアを開けると、目の前の光景に驚愕し、入口で動けなくなった。

「ほら……俺、大丈夫だから、学校行ってくれよ。」

「何が大丈夫だ！？ 大丈夫なわけないだろ、床に血だらけじゃないか！」

ベッドに横たわるアデは顔色が真っ青だった。彼はあの夢が現実だったことを知り、挿入された時に太ももを伝った熱い液体が自分の血だったことも知っていたが、ここまでひどいとは思わなかった。

アデは苦労してベッドの下を見た。血はこぼれたワインのようにベッドの足元周辺に血だまりを作り、垂れたシーツからまだ血が滴っていた。

当時のアデとラプラスは外で学び、懐事情が苦しく、アルバイトはしていたものの、家賃と食費がかさみ、病院に行く費用は小さな額ではなかった。医学生
の先輩に連絡する時もラプラスは迷っていたが、医学校で成績優秀なラプラス
がアデの体調を確認した後、失血が多かっただけで出血は止まり、意識ははっきりしており、ショック状態にはなく、大事には至らないと判断し、先輩に来てもらうのはもう一度アデの体調を確認するためだった。

ラプラスの先輩はすぐに了承し、十分後には彼らの借りているアパートの前に到着した。

.....

「ああ、電話で聞いたよりずっと状況が深刻だな。」ラプラスの先輩がドアを開けて言った。

「実は電話する前にアデの状況を確認したんだけど、失血が多い以外に大きな問題はなくて、出血箇所の傷口もすでに塞がってる……分かると思うけど、外で学んで金がないだけじゃなくて、もう一つ病院に行かない理由があるんだ。俺が見た、いわゆる傷口を……見れば分かるよ。」ラプラスはアデのベッドのそばに来た。「アデ、まだ起きてるか？」

「うん。」

「俺の先輩が来た……これは俺の先輩、プリット。悪いけど、もう一度股間を確認させてくれ。」

「うん。」アデは頷き、眉を少し寄せ、乾いた唇を裂いて笑った。「はは、ちょっと恥ずかしいな……」

「まだ笑う元気があるなんて、大丈夫そうだな。」

ラプラスはベッドの足元で布団をめくり、血の臭いが一気に鼻を突いた。

「あ？ これは？」

「これでプリットも分かっただろ。金の問題だけじゃなくて、アデの股間の問題だ。病院に行けば絶対に噂が広がって、アデの今後の生活に影響が出る。これは俺たちで話し合って出した結論だ。」

「分かった。」プリットは鞆を開け、聴診器、血圧計などの携帯医療器具を取り出し、アデに通常の検査を行い、続けて言った。「確かに大事には至っていない。通常この出血量ならショック状態になっているはずだが、アデの様子を見ると虚弱以外に……でもこれらは精密機器じゃないから、体内状況までは分からない。この数日は俺も休んでここに残り、アデを観察・介護する。俺の父は近くの国立病院の院長で、母と姉もそこで働いている。何か急変があれば必ず病院に行く。他の病院は保証できないが、アデがその病院で治療を受けるなら、家族に絶対に秘密厳守を徹底させる。ただ、今すぐ行くとなると救急扱いになり、関わる人が少なくなるほど秘密は守りにくい。仕方ない、アデの意向通り、まずは家で観察だ。体が少し回復したら精密検査をしよう。」

「分かった。」

.....

.....

ちょうどチャーリーとサリフェンが興味深くアデの日記を読み、アデの過去を知っている時、突然パソコンからメールの着信音が鳴った。

「おお、きっとラプラス叔父さんからのメールだ。」

チャーリーは日記を閉じ、パソコンの前に行き、サリフェンもそれに続いた。

メールにはこう書かれていた：

「チャーリー、アデの日記を見つけたのだろう。アデの過去について少しは知ったはずだ。チャーリー、君の誕生はとても特別だった。アデがあゝの悪夢から目覚めて二ヶ月後、自分が妊娠していることに気づいた。私たちはプリット一家の助けを得た。彼らは治療費を取らなかったが、アデの体を研究できるという条件だった。アデは同意した。アデが君を孕んでいる過程で検査をした。

表面上、悪夢から目覚めた後のアデの体は、陰嚢と肛門の間に女性の陰戸に似た形の体内へ通じる通路が現れていた。機器で確認したところ、腹の中に胎児が育っていた。それが君、チャーリーだ。しかし君を孕んだ子宮は普通の子宮ではなかった。卵巣がない。君を産んだ後も、それが一回限りの子宮であることが証明された。陰嚢と肛門の間は、知っての通りスペースが狭く、産道が細すぎて自然分娩は不可能だった。そこで君が満期になった後、アデに帝王切

開を行った。君が生まれた後、私たちはアデの体をしばらく観察したが、数ヶ月後、いわゆる子宮はアデの体に吸収され、消えてしまった。陰囊と肛門の間の通路口も、傷口のように時間とともに徐々に閉じ、小さくなり、最終的に癒合した。君が生まれた後、アデは父であり母でもあった。君は生まれつき喘息だったから、六歳の時にアデは市中心部から遠い郊外に引っ越した。そこで生活するのは不便が多いが、君の病状には良かった。家にある写真について、ごめん、チャーリー。君を騙した。でも許してほしい。私たちは君に良い幼少期を過ごしてほしい。ただの善意の嘘だ。写真の中の君の『母』は、私の先輩の姉だ。君の出産を手伝ったのは私ではなく彼女だ。可能なら本当に君たち父子と会って話したいが、距離が遠すぎて、電話とメールでしか連絡できない。」

「最後に、君のお父さんによろしく伝えておいてくれ。さようなら。」 ラプラス。」

「そうだったのか。」

「ラプラス叔父さん、メール見ました……」 チャーリーはメールを読んだ後、ラプラスへの返信を書き始めた。

.....

数分後、チャーリーはメールを編集し終え、ラプラスに送信しようと送信キーを押した瞬間、家の中の照明が突然点滅し始めた。電圧が低いかのように。

「これは？」チャーリーが言った。

「こんなことがよく起きるのか？」サリフェンが尋ねた。

「い、いえ、数ヶ月前に郊外の线路を調整してから、こんなことはもう起きていませんでした。」

サリフェンはチャーリーの左手首を握り、「俺から離れるな」と言った。

「え？」

「スーパーでアデと遭遇したことを覚えているか？」

「まさか、また……」

チャーリーの言葉が終わる前に、目の前が突然真っ暗になった。彼は急いでポケットから携帯を取り出し、ライトをつけた。

「まさか、ここまで追ってきたとは。」

遠くに一对の血のように赤い大きな目が、点滅しながら徐々に近づいてきた。

「チャーリー、ここに座って動くな。」

「何をするつもり？」

「そいつと戦う。」

そう言うと、サリフェンの背中から黒い一對の翼が服を裂き、尻尾も服の中から這い出てきた。口の中でチャーリーには理解できない言葉を呟っているようだった。

突然、炎のような紫色の霧気がサリフェンの周りを包み、血赤い目の主人はいつの間にかサリフェンの目の前に現れていた。それは大きく口を開けて咆哮し、牙を露わにし、腥臭で腐敗した臭いを放ち、黒く細長い指を寄せ集め、鋭い爪がドリルのように形成され、サリフェンに向かって猛烈に突き刺さった。

「サリフェン！」チャーリーが叫んだ。

言う間もなく、サリフェンは一躍跳び上がり、翼を使って空中に一瞬浮かび、目の前の悪魔の太い腕に着地した。体周りの紫色の霧気がサリフェンの右拳に集まり、続いて突進し、サリフェンの拳が悪魔の正面顔面に激しく叩き込まれた。

血眼の悪魔は悲鳴を上げ、一声で慌てて逃げ出した。

「ちっ、仕方ない。」悪魔が逃げたのを見て、椅子にいるチャーリーを振り返り、サリフェンが言った。

続いて、家の中は正常に戻った。

「サリフェン、大丈夫か？」

「うん、大丈夫だ。」

細心のチャーリーはサリフェンの右腰の服が鋭い刃物で切られたように裂け、血に染まっているのを発見した。

「怪我してる？」

「こんな小さな傷なんて大したことない。」

「そんなわけない、待って、救急箱取ってくる。」

「だめ、そいつが本当に遠くに行ったか分からない。また戻ってくるかもしれない。チャーリー……離れるな……俺のそばから……」突然の脱力感で、サリフェンは地面に倒れ、ぼやけた視界の中でチャーリーが地面に膝をついて叫んでいるのが見えた。

「え？ サリフェン……サリフェン？ 大丈夫か？ サリフェン?!」

……

サリフェンは微かに目を開け、徐々に意識と感覚が戻ってきた。彼は体が熱く、重く、呼吸もやや急で、息苦しいように感じた。サリフェンは、どうすれば正常に戻るかを知っていた。

傍らにはチャーリーがベッドの端にうつ伏せで、深く眠っているようだった。

「俺……でも、だめだ。とりあえず、水を飲もう……」サリフェンは独り言を言い、苦労して腕を布団から出し、ベッドサイドテーブルの水の入ったグラスに伸ばした。サリフェンは全力でグラスを取ろうとしたが、持ち上げることができず、諦めて腕を戻そうとした瞬間、グラスを倒してしまい、水が溢れ出し、チャーリーの頭と体にかかった。

「あ——」チャーリーはびくりと跳ね起き、瞬時に目が覚め、腰を起こし、呆然とサリフェンを見た。

「か、杯が落ちるぞ、チャーリー。」

その言葉を聞いたチャーリーは急に首を振り、両手を伸ばし、落ちる杯をキャッチした。

「ふう……よかった。」チャーリーは杯をベッドサイドテーブルに置き、「起きた？」

「うん。」

「なんだか息が荒いね。」チャーリーはサリフェンの額に触れ、「すごく熱い、熱が出てるみたい。これが力を使った代償？」

「使う箇所が違うだけだ。」

「そうか。でも今はそんなことより、起きたのにどうして起こしてくれなかったの？ 水飲みたかったんでしょ？」

「うん……」

「無理しないで、僕が飲ませてあげる。」

「い、いらない、面倒をかけ……」

「大丈夫。」

チャーリーはキッチンに行って水を一杯入れ、ついでに雑巾を取ってベッドサイドテーブルの水溜まりに置いた。

チャーリーはベッドの端に座り、サリフェンを起こして支え、サリフェンはチャーリーの胸に寄りかかり、チャーリーは水の杯をサリフェンの口元に近づけた。

「ごく、ごく、ごく……はあ——」

サリフェンは一気にグラスの中の水を飲み干した。

「あ？ ゆっくり飲んで、むせないように……もう一杯取ってきておくよ。」

「うん。」

チャーリーは優しく彼をベッドの頭側に下ろし、ベッドサイドテーブルの雑巾で周りの拭き残しの水を拭き取り、再びキッチンに行って白湯を一杯取ってきた。

「そうだ、服を着替えなきゃ。」部屋に戻ったチャーリーが言い、手の杯をベッドサイドテーブルに置き、クローゼットのそばに行き、濡れた服を脱いだ。

「ここで着替えるのか？」

「ん？ あ、ここ僕の部屋だよ、服は全部ここにあるから、当然ここで着替えるよ。」

「あ、いや、そういう意味じゃなくて、どう言えばいいか……」サリフェンは布団の中に縮こまった。

「大丈夫？」チャーリーは彼が横になったのを見て、体調が悪いと思ったのか、パーカーを着ただけでベッドのそばに行った。「どこか痛い？」

「い、いや……はあ、やっと匂いが薄くなったのに。」

「匂い？ 何の匂い？ 僕、臭い？」

「いや、違う……いや、もう回りくどく言うのはやめよう。君も知っていると思うが、俺は地表の生物じゃない。サタン様の命令で地上に来て君を地獄へ護送する悪魔だ……でも悪魔にも種類がたくさんある。大悪魔、怯魔、魅魔、クァセ魔など。少し言いづらいが……俺の種族は、魅、魅魔だ……地表に来て、本来の力を維持するには人間の精気を吸収しなければならない。それが俺が力を使った後にこんな状態になる理由だ。俺は初めて地上に来て、人間の精気を吸収した経験がない。だから君から発散される匂いが俺にとって非常に魅力的で、極度に空腹の人間が食べ物に誘惑されるのと同じだ。魅魔にとって、精気に満ちた人間の匂いは、魅魔の性欲を掻き立てる媚薬だ。だから俺はわざと水を君にかけて、匂いを散らそうとした。」

「ああ、そういうことか。僕のイメージの魅魔とはちょっと違うね。魅魔って直接魅了をかけて精気を吸うと思ってた。」

「はは、そういう魅魔もいるよ。」

「じゃあどうして直接僕に魅了をかけなかったの？ その方が楽でしょ。」

「.....なんとなく、そうするのは良くない気がした。」

「そうか。でも君の初めてを僕にくれて本当にいいの？」

「どうして逆に俺に聞くんだ？」

「だって、君すごくカッコいいし、体格も高くて逞しい。悪魔としてほぼ無限の寿命と強大な力を持ってる。ああ、羨ましい！ これが悪魔の特権か？ くそ。

ははははは、冗談だよ.....でも君が普通の人間でも、あの外見で地表にいたら、

絶対にどこでも優遇される。内面が腐っていても、美を追求する人間は美しい

ものすべてを許す。外見が完璧な殺人犯でも、国民が情状酌量を求めるくらい

だ。僕と比べて、君は平凡すぎる上に持病持ちの人間だ。君にとって僕は、芸

術品みたいなものだ。そして僕の心の中では、お互いに感情がある二人だけが

結ばれるべきだと思う。人間はいつも美しいものを求めるから、僕の心が君に

好感を持っているのは認めざるを得ない。だから逆に聞くんだ。君は僕の匂い

に魅了されて反応した以外に、心はどう？ 僕に対して何か感じることはある？ 僕本人への情欲でも色欲でもいい。何か感情があって僕と結ばれたいと思うなら、お互い合意だから何も問題ない。もし君がただ僕の精気の匂いで生理反応を起こして、それを解消するために結ばれるだけなら、僕がずるすぎる。それは強姦と何が違う？ もっと簡単に言うと、君の今の状態は僕に媚薬を盛られたようなものだ。事実そうだ。もし君の心が拒否してるなら、僕が君に好感を持ってセックスしたいと思っても、それは僕の心理的・生理的欲求を一方的に満たすだけだ。君は嫌いな相手と無理やりセックスさせられて、心の中で極度に嫌悪するだろう。二人の結びつきは、楽しいことであるべきだ。僕は自分のことだけを考えたくない。」

「本当にそう思うのか？」

「もちろん。」

「チャーリー、君は本当に変わった人間だ。」

「君も同じだよ、変わった悪魔だ。」

サリフェンは頭を下げ、少し沈黙した後、笑った。「ははははは、いいよ、俺は君がとても気に入った。だから、今のままでいるか、それとも女の姿に変えるか？」

「え？ そんなこともできるの？」

「もちろん。あるいは、両方ある状態を保つこともできる。どうしてほしい？」

「どっちが君の本当の姿？」

「本当の姿か……雄性が俺の本当の性別だ。それに、悪魔の本当の姿は、人間が見たいと思うものじゃない。」

「そんなにひどい？ さっき襲ってきた悪魔みたい？」

「へへ、そこまではいかない。」

「サリフェンは男のままでいいよ。むしろ女の姿の方が僕には魅力がない。だから君が一番本当の姿でいてくれ。そうすれば今の君も楽だろう。」

「はははは……」サリフェンが突然大笑した。

「どうした、何がおかしい？」

「チャーリー、君は顔を赤らめず心臓を高鳴らせずに恥ずかしいことを平気で言えるタイプだな。」

「え?! 僕だって、こんなに見えて、すごく緊張してるんだから! 僕も初めてで、どう始めればいいか、どうするのが正しいか分からない.....僕だって、すごく考えたんだよ。」

「もちろん分かってるよ。君は俺の知ってるある人に似てる。」サリフェンは小声で言った。「ははは、君は本当に馬鹿だな。忘れるな、俺は魅魔だ。あの方面のことは俺の導きに従えばいい。絶対にチャーリーを気持ちよくさせてやる。本当の姿ももちろん見せてやるよ。気に入ったって言ったからな。でも心の準備をしておけ。受け入れられなかったら、また人間の姿に戻す。」

「大丈夫、絶対受け入れられる。」

「ははは、よく言うな。じゃあ受け入れられなかったら、君を吸い尽くすぞ。もちろん命は残す。サタン様に報告しなきゃならないからな。」

「うん、いいよ。」

「え.....チャーリーは本当に顔を赤らめず恥ずかしいことを言えるタイプだな。」

「僕、もちろん考えてたよ。本気だよ。」

「はいはい。じゃあ、悪魔の姿を現して見せるよ。」

チャーリーは頷き、唾を飲み込んだ。

続いて、サリフェンは布団をめくり、ゆっくり立ち上がり、顔が赤く、呼吸が荒く、彼はチャーリーのシャツを脱ぎ、引き締め充実した、完璧と言える胸腹筋が現れた。彼は腹部の包帯を見下ろし、チャーリーに微笑み、チャーリーの頭を撫で、「ありがとう」と言った。チャーリーも自分の頭の上にあるサリフェンの右手を撫で、顔を赤らめて恥ずかしそうに微笑んだ。

続いて、サリフェンは腹部の包帯を残し、両手をズボンの腰に伸ばし、自分のズボンを脱いだ。薄暗い灯りの中で、黒赤い陰毛と、わずかに充血したように見える二本の太い陽具が、サリフェンがズボンを下ろすにつれてチャーリーの目の前に現れた。

チャーリーは目を大きく見開き、驚いてサリフェンの股間を見つめ、無意識に両手を口に当てて揃え、もう一度唾を飲み込んだ。「これが魅魔か!!!? !!!?」

チャーリーは心の中で叫んだ。

サリフェンは彼の驚いた様子を見て、眉を少し寄せ、目を細め、口角を少し上げ、続いて目を閉じた。周りに紫色の炎のような霧気が現れ始めた。それはサリフェンがあの大巨体と戦った時に現れた霧気と同じだった。沸騰する紫色の霧気が徐々に濃くなり、色は紫から深紫紅へ、最後に黒赤い沸騰する霧気がサリフェンを包み込んだ……

数分後、霧気が徐々に散り、サリフェンの本当の姿がゆっくり現れた。

元々高大な体躯のサリフェンは、ベッドに立った時、頭と天井の距離が十数センチしかなかった。本当の姿になったサリフェンは、少し体を曲げなければならなかった。頭の長い黒い双角が天井に触れていたからだ。

サリフェンはベッドから降り、チャーリーの前に立った。

本当の姿のサリフェンは、人間形態よりさらに逞しく見え、チャーリーの身長は 186 センチで、頭頂がサリフェンの鎖骨にしか届かず、二人の距離が数センチしかないため、チャーリーは首を仰がなければサリフェンの正面顔を見ることができなかった。チャーリーが仰いだ瞬間、二人の視線が合ったが、数秒も経たずにサリフェンはチャーリーの視線を逃げるように目を逸らし、チャーリーは眉を寄せ、視線を下げ、無意識にサリフェンの黒赤い毛が生えた両腕が